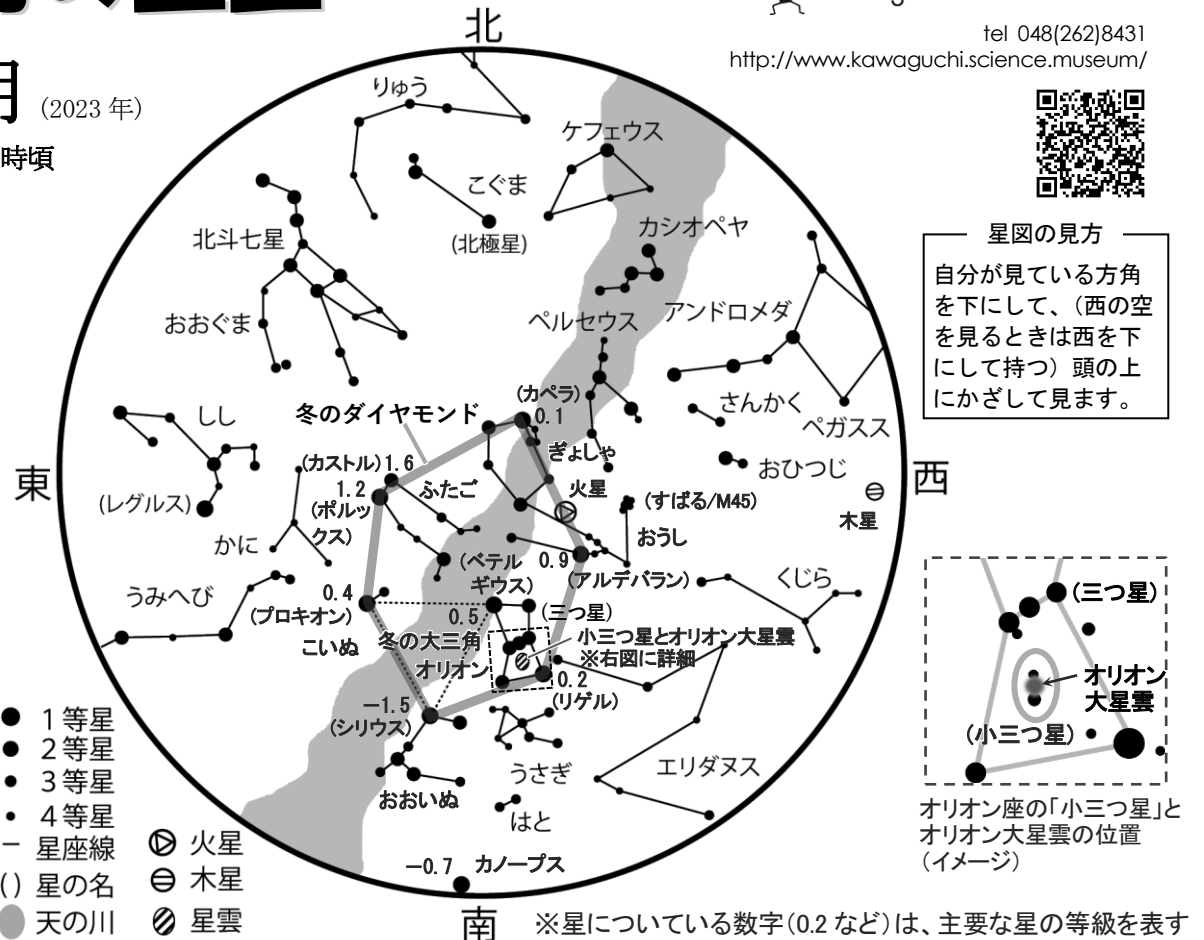


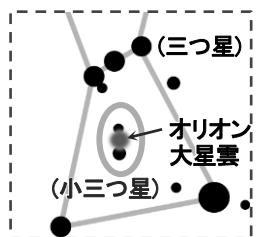
# 今月の星空

2月 (2023年)

中旬 20 時頃



— 星図の見方 —  
自分が見ている方向を下にして、(西の空を見る時は西を下にして持つ) 頭の上にかざして見ます。



オリオン座の「小三つ星」とオリオン大星雲の位置 (イメージ)

月 齢 ○満月 6日、●下弦 14日、●新月 20日、●上弦 27日

## 惑星情報

水星 日の出前 南東(いて座 0等)※上旬のみ 金星 日の入後 西(みずがめ→うお→くじら→うお座 -4等)  
火星 夜のはじめ頃 南※天頂近く(おうし座 0等) 木星 夜のはじめ頃 西(うお→くじら→うお座 -2等)

## ★注目の惑星と今が見ごろの冬の星座

日没後の西の空には、-4等の金星と-2等の木星に目が留まります。上旬では、金星よりも木星が20度ほど高いところにありますが、日に日に距離が縮まり、3月2日には0.5度(満月ひとつ分)まで接近し、その後上下が入れ替わります。2つの星が見やすい高さにある18時台の観望がおすすめです。

夜のはじめ頃には、オリオン座が南の空に昇り、冬の星座が見ごろです。6つの「1等星」をつなぐ「冬のダイヤモンド」が星座探しの目安となります。ちなみに、「1等星」と言っても、実際には星の明るさはそれぞれ異なるので、よく見比べてみましょう。星の明るさには、等級が1つ小さくなる(2等→1等等)と、約2.5倍明るくなる関係※があります。例えば、リゲル(0.2等)は、ポルックス(1.2等)の約2.5倍の明るさ(1.0等差)、シリウス(-1.5等)はポルックスの約12倍(2.7等差)と計算できます。※ポグソンの式…「1等星は6等星の100倍明るい」という関係から、「2つの星の明るさの比」=100<sup>(等級差)/5</sup>と求まる。

## ★オリオン大星雲 (M42) ~多くの星が生まれる星形成領域~

オリオン座の「三つ星」のすぐ南、暗い星が並ぶ「小三つ星」の中央(星図参照)に、オリオン大星雲があります。見かけの大きさは約1度(満月2個分)で、4等に相当する明るさがあるため、空の暗いところでは肉眼でも存在が確認できます。その中心部には「トラペジウム」と呼ばれる生まれたばかりの星が集まる星団があり、小型の望遠鏡でも特に明るい4つの星が観測できます。



## ■ コラム~幻の新元素「ネブリウム」

19世紀末、オリオン大星雲のスペクトルに見られた緑色の輝線を放つ物質が何であるかを当時の化学では説明できず、nebulium (星雲) にちなみ、未知の新元素「ネブリウム」が予想された。その後、極めて低密度かつ高温の条件下で、2価の酸素イオン(電子が2個はがされた酸素原子)が放つものと判明した。

図 ハッブル宇宙望遠鏡が捉えたオリオン大星雲(距離 約 1,500 光年)